



# 埼玉県立大学 20年の歩みとこれから

20<sup>th</sup>  
*Anniversary*  
2019



# 保健・医療・福祉の新しい教育を目指して

20年前に誕生した本学。その使命は、高度化・複雑化する保健医療福祉の課題に対応できる質の高い開学以来、着実な歩みを進める中で、この分野における教育研究の中核として、地域社会に貢献できる

人材の育成である。  
人材を多く輩出してきた。



Education

## 保健・医療・福祉の「連携と統合」

本学は、保健・医療・福祉の異なる分野を一つに統合した、全国初の「保健医療福祉学部」を有する大学として1999年に埼玉県越谷市で開学した。

少子高齢化が進む中、人々が健康を維持し、質の高い豊かな生活を送るためには、多様な取組やサポートが必要である。また、その際には、それぞれの専門職がチームとして取り組むことが有効である。

そのため、関連する多様な分野の専門職が「連携」し、対象となる患者や利用者において「統合」された支援やサービスを提供することが求められる。こうした支援・サービスを担うことができる人材の育成を、本学の教育の使命としてきた。



授業風景

## 専門職連携教育(IPE)の確立を目指して

「連携と統合」をめざす教育は開学当初のカリキュラムにも特色付けられ、やがて英国を中心に展開する「専門職連携実践」(IPW: Interprofessional Work) と、それを実現するための「専門職連携教育」(IPE: Interprofessional

Education)の考え方に支えられ、さらに発展していった。

IPEによる教育プログラムは、2005年には、文部科学省の「特色ある教育支援プログラム」と「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」の2つの補助事業に採択された。それによってIPEの取組はさらに加速し、英国から教育実践者を招聘した国際セミナーの開催や教員による現地での研修受講などを積み重ねた。

その結果、本学では、英国の実践等を踏まえ、IPWを「複数の領域の専門職者が、それぞれの知識と技術を提供し合い、相互に作用しつつ、共通の目標の達成を患者・利用者とともに目指す協働した活動」として捉え、IPWを実践することができる人材の育成、すなわちIPEを本学の教育の特徴として位置付けた。

そして、IPEについては「複数の領域の専門職者が、連携及びケアの質を向上するため

## 【IPW実習】

IPEでは、大学・学科の枠を超えた少人数の学生チームが、病院や施設において、患者・利用者などに対する援助計画を立てる「IPW実習」も行われている。県内約80か所の保健医療福祉の現場で展開される地域密着型のIPW実習は、他に類をみない本学の教育の特長である。



2006年にスタートした際の実習風景

に、同じ場所でもともに学び、お互いから学び合いながら、お互いのことを学ぶこと」として理解し、その後のカリキュラムにも継承されている。

2012年には、埼玉医科大学、城西大学、日本工業大学との共同プロジェクトとして、文部科学省の「大学間連携共同教育推進事業」にも新たに採択された。

人々の暮らしを総合的に支える視点から、医学、薬学、建築学など関連領域を増やし、4大学共通の科目開講や評価指標の開発等を通じ、IPEを一層拡充させることとなった。この取組は文部科学省から最高評価(S評価)を受けた。

## 教育目標を実現するカリキュラムの展開

開学当初から保健・医療・福祉の連携と統合を目指すカリキュラムを展開してきたが、更なる教育の充実を図るべく、2006年度、2012年度、2019年度にカリキュラムの改定を行った。2019年度からの新たなカリキュラムでは、「人間性の涵養と総合力の養成」というコンセプトのもと、将来の実践を基礎づける人間力の向上を目指すことに主眼を置いている。

ところで、こうした教育には、学生自身の主体的に学ぶ姿勢(アクティブラーニング)が欠かせない。そのため本学では、開学当初から、少人数で問題や課題を解決しながら学ぶチュートリアル教育(PBL)にも力を入れてきた。

また、シミュレー



PC教室

タ機器、マルチメディア教室、eラーニングシステムといった情報環境を整備することで、アクティブラーニングをサポートする体制を構築し、自ら考え、行動する学生の主体的な学習を推進している。

## 先端的な研究・教育・職業人人材の育成

学部教育の進展とともに、高度な実践や研究に関する知識・技術を磨き、高めることへの社会的要請を踏まえ、2009年には大学院に修士課程(現・博士前期課程)が、2015年には博士後期課程がそれぞれ誕生した。大学院は、保健医療福祉学研究科として教育を展開している。

博士前期課程では、看護学・リハビリテーション学・健康福祉科学の各専修を設置し、保健医療福祉学の基盤を共有しながらそれぞれの専門分野の発展を目指している。

具体的には、実践現場との連動を重視したリカレント教育に軸足を置きながら、自らの専門分野を究めつつ、保健医療福祉領域の学際的知識、技術を総合的に駆使できる能力を身につけた人材の育成を目標としている。

また、博士後期課程は、専修の区分を置くことなく、より統合化された保健医療福祉学としての研究課題の探究を極める課程となっている。

具体的には、専門職連携の更なる発展を意識しながら、学際的な思考と多様な価値観を尊重する人間性を基盤に、先端的研究や教育を推進できる人材の育成を図っている。



大学院の授業風景

## 健康と生活の向上に役立つ 実践的な研究を目指す

本学は保健医療福祉分野を専門とする大学として、地域に根差した研究拠点の役割を果たしている。

# Research and Development

# Contributions to the Community

## 多様なアプローチで本学に ふさわしい地域貢献に取り組む

地域における多様な学習ニーズを満たす公開講座等を独自に展開し、一方で、企業や行政と連携した公開講座や講師派遣、共同研究・受託研究などに取り組んできた。

### 社会のニーズに対応した研究の展開

本学は、開学以来、保健医療福祉分野における実践と教育の質の向上等を目的に、社会のニーズに対応し



武里団地における健康長寿プロジェクト研究

た研究を行ってきた。また、研究チームによる地域密着型のプロジェクト研究にも取り組んでいる。

その一つとして、埼玉県小鹿野町における高齢者の寝たきり予防の研究は、開学時から長年継続し、体力測定や健康体操など町の健康づくり事業にも結びついた。また、春日部市武里団地における生活習慣病予防の研究やさいたま市における骨粗しょう症・転倒予防の研究なども継続して行い、地域に様々な研究成果を還元してきた。



シミュレーション医療教育用ロボットアーム

産業界・行政・本学の、いわゆる産官学が連携した研究は、特許にも結びついている。「ロボットに身体障害者の病的運動を記憶・再現させて用いるシミュレーション医療教育用ロボットアームの開発」など、本学は

2018年度現在、4件の特許を取得している。

### 研究の奨励

開学4年目には、教員の職位に応じて支給される個人研究費を撤廃し、学内研究費を一

度プールした上で競争的に配分する「奨励研究費」制度を導入した。それと同時に、外部有識者により構成される「研究評価委員会」も組織した。このような制度改革などを通して、教員の研究活動支援や研究の質を担保してきた。

また、外部研究資金を確保するため、文部科学省の科学研究費(科研費)助成事業の獲得にも大学を挙げて取り組み、2018年度の当該事業への教員の応募率は、94.8%と高い水準にある。なお、同年度の本学における科研費採択件数に占める女性教員の比率は64.3%で、全国第5位となっている。

### 研究開発センターの設置

より積極的に地域の諸課題や時代の先端を見据えた実用的かつ実践的な研究に取り組むため、2016年に「研究開発センター」を設置し、専任教授を配置した。教員の研究支援のほか、我が国を挙げての課題である地域包括ケアシステムの構築をテーマとした研究プロジェクトを推進している。さらには、地域産学連携センターと連携して地域包括ケアを推進するためのネットワーク会議やシンポジウム、セミナーなどを開催している。



研究開発センター開設記念シンポジウム(2017年2月3日)

### はじめは公開講座から

本学が有する人的資源や教育研究成果を地域社会や行政機関等に還元すべく、開学当初より広く県民を対象とした公開講座を、多様なニーズに応じて開催してきた。さらには、市町村との連携による高齢者対象の生涯学習講座や、県との連携による小学生・高校生向けの教育事業を展開するなど、活動の幅を広げている。また、本学教員が県や市町村の審議会等の委員として多く参加し、行政への助言なども行っている。



埼玉県青少年夢のかけはし事業「看護師を目指そう！」

### 地域保健医療福祉水準の向上を目指す

保健医療福祉従事者を対象とした講座なども数多く開催してきた。2005年には日本看護協会が定める認定看護師資格を取得するための「認定看護師教育課程」を開設した。この課程は制度変更に伴い2019年3月にその役割を終えたが、多様な講座やプログラムを通じ、専門職のキャリア



認定看護師教育課程

アップと地域の保健医療福祉水準の向上に積極的に取り組んできている。

### 産官学連携を推進

行政や産業界との連携活動を推進するため、2008年に「地域産学連携センター」を設置。2009年に越谷市、2011年に春日部市と包括的連携協定を、2019年には志木市と「地域包括ケアシステムの構築に関する協定」を締結するなど、官学連携を進めている。



彩の国ビジネスアリーナ

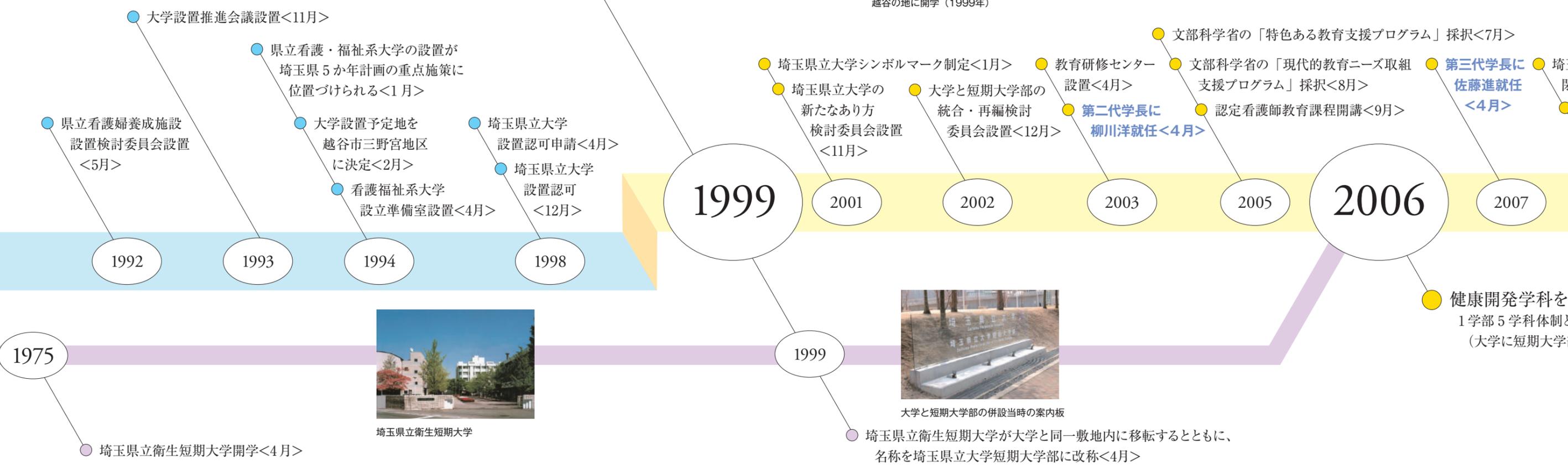
産学連携では、産業界主催の県内外の展示会に本学教員の研究成果を出展したり、本学の知的資源を研究シーズ<sup>※1</sup>集として公表するなど、企業等とのマッチングを積極的に進めている。

※1 研究シーズ：将来、事業化・製品化等の可能性がある研究素材

### 主な地域貢献事業

高齢者対象の生涯学習講座	シルバーカレッジ、彩の国いきがい大学(講師派遣)等
小学生向けの教育事業	埼玉県青少年夢のかけはし教室(チャレンジ育成事業)等
地域の健康づくり事業	小学校1~3年生の親子を対象としたサッカー教室(浦和レッドダイヤモンズ(株)協力)等
保健医療福祉従事者を対象とした事業	専門職講座、地域専門職連携推進会議等
官学連携事業	越谷市学生議会に参加 武里団地プロジェクト(春日部市)政策提案コンテスト(さいたま市・春日部市)に参加等
産学連携事業	「イノベーション・ジャパン」「埼玉北部地域技術交流会」「彩の国ビジネスアリーナ」「さいしんビジネスフェア」への出展等

# 埼玉県立大学の歩み



埼玉県立衛生短期大学



越谷の地に開学(1999年)



初めてのIP演習(2006年)



大学と短期大学部の併設当時の案内板

埼玉県立衛生短期大学が大学と同一敷地内に移転するとともに、名称を埼玉県立大学短期大学部に改称<4月>

## 開学までの道のり

1992年5月に埼玉県が設置した「県立看護婦養成施設設置検討委員会」は、報告書の中で「質の高い保健医療・福祉サービスに対応できる人材養成」のための「県立看護系大学」設置の必要性を提言した。

1993年7月には、埼玉県議会が「県立看護・福祉系大学の設置を求める決議」を採択した。

こうした社会的要請を背景として、1994年1月、埼玉県5か年計画の重点施策に「県立看護・福祉系大学」の設置が位置づけられ、以降、大学設置に向けた取り組みが着実に進んでいった。



大学建築現場

## 大学開学

1999年4月、全国初の「保健医療福祉学部」を有する埼玉県立大学が開学した。保健医療福祉学部内に看護学科、理学療法学科、作業療法学科、社会福祉学科を置く、1学部4学科体制でスタート。初年度の入学人数は166名であった。

以降、本学は保健医療福祉の分野において高度なサービスに対応できる資質の高い人材の養成や地域社会への貢献を目指し、その歩みを進めている。



第1回入学式(1999年4月14日)

## キャンパス

本学の大きな特徴はキャンパスにもある。本学のキャンパスは、床面積 54,000 m<sup>2</sup>、建築面積 34,000 m<sup>2</sup>に及ぶ大きな施設で、施設ごとの配置にも連携と統合の考えを反映している。例えば、各学科の相互交流を重要なコンセプトに位置付けており、他大学のように学科ごとで分棟配置せず、すべての実習・実験室が1階に配置されている。また、ガラス張りの外観や緑化が施された屋上、吹き抜けの通路などが印象的な設計で、1999年のグッドデザイン賞金賞を受賞している。



梅山本理頭設計工場の設計によるキャンパス

## 統合と再編

開学3年目の2001年11月、国立大学改革の流れを受け、「埼玉県立大学の新たなあり方検討委員会」が設置された。この報告書では県の財政状況等も踏まえつつ、人材養成という社会的ニーズに応えていくために、本学と埼玉県立大学短期大学部の統合・再編が提案された。これを受け、本学と埼玉県立短期大学部の下に、「大学と短期大学部の統合・再編検討委員会」が置かれ、統合・再編、学科構成等の諸課題の検討を行った。

その結果、本学が埼玉県立大学短期大学部の人材養成機能を発展的に継承することとし、埼玉県立大学短期大学部は2008年3月をもって閉学することとなった。また、生活習慣病の予防など、第1次予防に重点を置いた地域ぐるみの健康増進活動の展開が今後重要になると検討され、健康増進を積極的に進める「健康開発学科」の創設や各学科の定員増などが決定された。

2006年4月から本学は現在に続く5学科体制となった。



統合再編を果たした2006年度の入学式

# 公立大学法人 埼玉県立大学設立<4月>

初代理事長に利根忠博就任<4月>

教育開発センター、  
学生支援センター設置<4月>

東日本大震災<3月>

第四代学長に三浦宜彦就任<4月>

春日部市と包括的連携協定締結  
<11月>

社会福祉学科を  
社会福祉子ども学科に改組<4月>

第二代理事長に江利川毅就任<4月>

第五代学長に  
萱場一則就任  
<4月>

第三代理事長に  
田中滋就任  
<4月>

# 埼玉県立大学 創立20周年<4月>

学章制定<4月>

高等教育開発センター設置<4月>

キャリアセンター設置<4月>

創立20周年記念式典開催<5月>

志木市と地域包括ケアシステムの構築に関する協定締結<2月>

2010

2011

2012

2014

2015

2016

2017

2018

2019

2008

2009

埼玉県立大学創立10周年<4月>

大学院保健医療福祉学研究科(修士課程)を設置<4月>

大学院サテライトキャンパス(さいたま市浦和区)を設置<4月>

創立10周年記念式典<5月>

越谷市と包括的連携協定締結<7月>

彩の国連携力育成プロジェクト開始  
(文部科学省の「大学間連携共同  
教育推進事業」採択)<9月>

研究開発センター  
設置<4月>  
大学歌制定<11月>

大学院サテライトキャンパスを  
さいたま市中央区に移転<4月>

大学院保健医療福祉学研究科  
(博士後期課程)を設置<4月>

基本理念制定<9月>



10周年記念式典(2009年5月31日)



移転後の大学院サテライトキャンパス(2009~2017年)



山西医科大学から初の留学生(2010年)



東日本大震災の被災地支援(陸前高田市・2011年9月24~27日)



彩の国連携力育成プロジェクト(2012年~)



大学歌完成披露式典(2016年11月28日)



移転後の大学院サテライトキャンパスがある埼玉県立小児医療センター(2017年~)



研究開発センターシンポジウム2018(2018年10月6日)

## 大学院設置

2009年4月、これまで輩出してきた卒業生および県内専門職に対するリカレント教育を軸に、各専門分野の高度専門職業人を育成することを目指し、大学院保健医療福祉学研究科(修士課程)が新設された。

初年度入学の大学院生は26名(入学定員20名)で翌年度に入学した者も含め、そのほとんどが実務経験を有する社会人であった。これは、社会人が授業を受けやすいよう、長期履修学生制度、平日夜間・土曜日開講、サテライトキャンパスの開設などの工夫の成果であった。



大学院設置後の案内板

## 公立大学法人化

国立大学法人法が施行され、2004年4月に全ての国立大学は法人化された。同時期、地方独立行政法人法も施行され、公立大学についても法人化が可能となった。

こうした流れを受け、埼玉県、本学でも法人化についての検討を進め、2010年4月、本学も公立大学法人に移行した。

この法人化により、県知事から任命された理事長の裁量の下、機動的で柔軟な大学運営が可能になるとともに、教育研究活動の活性化や地域貢献の拡大が図られた。

## 教育の新しい取り組み

2012年9月、文部科学省の補助を受けて、本学、埼玉医科大学、城西大学、日本工業大学の4大学と埼玉県で「彩の国連携力育成プロジェクト」がスタート

これは、多様な専門領域を学ぶ学生同士が、協力し合い、連携し合いながら最適なサービスを提供していく力を養成しようというものである。

医師や薬剤師、建築士など、本学にはない職種の学生たちとの実習は、開学当初から推し進めていた専門連携教育に大きな広がりをもたらすものとなった。



彩の国連携力育成プロジェクトに係る彩の国大学連携学長会議(2013年5月20日)

## 博士後期課程の設置

今後の超高齢社会を迎えるにあたり、より専門的な人材の養成が本学に期待されている。これまで本学は、学部に加えて大学院修士課程を開設し、高度専門職業人の育成に努めてきたが、こうした社会の要請に応えるべく、2015年4月、博士後期課程を開設した。保健医療福祉の分野で指導的立場に立ち、社会をリードできる職業人、教育者、研究者などの育成を目指している。



大学院博士後期課程の授業での発表風景

## 将来を見据えて

博士後期課程のスタートにより、名実ともに教育と研究の両輪が揃った。これを機に、2015年9月、教育と研究を含めた本学のあるべき姿を示す「基本理念」を制定し、教職員が一致結束して向かうべき方向性や学生が本学で学ぶ心構えを明示するとともに、卒業してもなお心の中で生き続ける目標・激励の言葉とした。2016年11月には、基本理念の学風への定着を目指して、「大学歌」(作詞は当時の在学生)も制定している。

2016年4月、「研究開発センター」を設立した。行政や地域社会に建設的な提言を行う役割がこれまで以上に果たせるよう、実践的な研究機能を強化した。

# 様々なことにチャレンジし、大きく成長する学生たち

本学は20年間で7,000名を超える卒業生を送り出した。  
本学での学生生活を通して様々なことを学び、卒業後は保健医療福祉分野を中心に最前線で活躍している。



Student Life

## 思いをひとつにする入学式

学生は北海道から沖縄まで全国から集い、本学で共に学ぶ思いをひとつに、これから始まる学生生活への期待を膨らませます。

なお、開学当時の入学定員は学部160人であったが、現在の入学定員は学部395人、大学院26人となっている。



入学式の様子

## 活発なボランティア活動

本学では、高齢者支援、障害者支援、保育支援、子ども支援など、保健医療福祉分野を中心とした様々なボランティア活動が盛んである。学生間で代々引き継がれていく活動も多く、難病のALS（筋萎縮性側索硬化症）の方々の介助を行うサークルは、埼玉県立衛生短期大学の時から活動が続いている。

また、災害発生時の支援や復興支援にも力を発揮してきた。新潟県中越地震(2004年)、東日本大震災(2011年)、越谷市竜巻被害(2013年)、熊本地震(2016年)、西日本豪雨



東日本大震災被災地での復興活動(岩手県気仙沼市)

(2018年)などにおいて、多くの学生が支援活動を行っている。東日本大震災時には、さいたまスーパーアリーナに避難してきた方の支援活動に延べ200名以上の学生が参加した。



東日本大震災被災地に向けた募金活動(南越谷駅)

さらに、2018年には、越谷市消防団「学生機能別団員」に参画。地域の防災活動にも取り組み始めた。

こうしたボランティア活動を通して地域社会に貢献すると同時に、人を支援するにあたって大切なことを学んでいる。

## サークル活動と大学祭「清透祭」

サークル活動も盛んである。2018年度のサークル加入延べ学生数は1,774名で、総学生数1,770名を上回る。保健医療福祉分野のサークルのほか、全国大会での優勝経験を持つ車いすバスケットボールサークル、地元自治会の夏祭りや県内福祉施設等においてダンスを披露しているサークルなどもある。2018年には、越谷市制施行60周年を祝う記念イベントでもダンスを披露した。

また、毎年秋には、大学祭「清透祭」を実行委員会を中心として開催している。サークルによるステージ発表、屋台出店をはじめ、学生が日頃学んでいる知識や技術を活かした公開講座など、様々な企画が行われている。あわせて、卒業生で構成される同窓会主催のホームcomingデーや、学生の保護者等で構成される後援会主催の講演会も行われている。



清透祭の野外ステージ

清透祭のフィナーレでは、花火を打ち上げることが毎年恒例となっており、地域住民にも親しまれている。これは、第1回の際に学生が教職員や地域の方から寄付を募って成功させたもので、現在までその伝統が引き継がれている。

## 【国際社会の中で】

本学は「国際性と地域性に基づく協働力」を教育目標の一つとし、保健医療福祉に関わる現象をグローバルな視点で理解しつつ、地域の人々と協働して活動できる人材の育成を図っている。

2005年に、オーストラリアのクイーンズランド大学への短期留学制度がスタート。その後、香港理工大学、北京大学、山西医科大学、チューリッヒアプラインサイエンス大学との交流を順次開始し、留学生の受け入れや送り出しを行うようになった。

海外に留学する障害学生もいるほか、臨床経験を積んでから、海外ボランティア等に参加する卒業生も少なくない。

## 夢に向かって飛び立つ～就職・進学～

学生は卒業後、医療機関や福祉施設をはじめ、企業、官公庁、学校など、幅広い分野へ就職



面接指導の様子

して行く。近年は大学院へ進学する学生も増えてきている。本学の進路決定率は非常に高く、2017年度生の進路決定率は98.3%である。

それはこれまで国家試験対策や面接対策など、就職活動支援に力を入れてきたことが背景といえる。今後の就職環境の変化に対応するため、2019年度には「キャリアセンター」を設置し、その支援機能を更に強化している。

山西省人民代表大会常務委員会・衛副主任来学(2018年10月23日)



オーストラリアへの留学(2005年3月22日)



食文化を考える国際交流(2005年12月3日)



## 基本理念

本学は、陶冶、進取、創発を基本理念として、  
保健医療福祉に関する教育・研究の中核となって  
地域社会に貢献します。

**陶冶** とうや 誠実で温かい心と主体性を持ち、多様な価値観を尊重する人間性を磨き高める

**進取** しんしゆ 広く先達に学びつつ、未来を志向する教育・研究に取り組む

**創発** そうはつ 多様な連携を通じて、予測を遥かに超える新たな価値を創造する

### 埼玉県立大学 大学歌

丸山 暁 作詞  
高橋 浩美 作曲

1 澄み渡る大空 連携の丘

人格の陶冶 薫る学び舎

人に寄り添い 博く愛す

さあ 埼玉県立大学の友よ

共に磨かん 清廉の心

2 吹き抜ける風 そよぐ木々の葉

進取の気象 充つる学び舎

志高く 叡智究む

さあ 埼玉県立大学の友よ

共に築かん 未来の礎

3 透き通る光 照らす道筋

創発の気概 漲る学び舎

心ひとつに 切磋琢磨す

さあ 埼玉県立大学の友よ

共に歩まん 希望の明日へ



### 埼玉県立大学の構成

#### 保健医療福祉学部

看護学科・理学療法学科・作業療法学科・社会福祉子ども学科（社会福祉学専攻・福祉子ども学専攻）  
健康開発学科（健康行動科学専攻・検査技術科学専攻・口腔保健科学専攻）

#### 保健医療福祉学研究所

博士前期課程（看護学専修・リハビリテーション学専修・健康福祉科学専修）  
博士後期課程

公立大学法人

## 埼玉県立大学

Saitama Prefectural University

〒343-8540 埼玉県越谷市三野宮 820 番地 電話：048-971-0500（代）／FAX：048-973-4807

<https://www.spu.ac.jp/>